

「子どもの心に残るのは親から買い与えられた物ではなく、

愛情を注いでもらったという感覚である」

以前ふと見つけたこの言葉が、ずっと私の中に残っています。私が物心つく前に両親は離婚し、私は両親と一緒に過ごした記憶もなく父方の祖父母のもとに引き取られました。簡単に言ってしまうと“普通の家庭に恵まれなかった可哀そうな子ども”とよく周りの人に思われ、周りから「大変だったね」「頑張ったね」と声をかけられることも多くあります。小さい頃は、友達の家族を見て「どうして私の家は違うのだろう」「私はどうしてお父さん・お母さんが居ないのだろう」と思う時がありました。祖父母に聞いても、はっきりした答えはもらえず、話しくさそう顔を見るとそれ以上聞くことはできなくなりました。小学校に上がって以降、両親が居ないことでいじめられた事もあり、悔しい思いや悲しい思いをしたことはあります。でも、この境遇だったからこそ今の私があると考えることができたのは、自分の周りには温かい気持ちに向けてくれる人がたくさん居ることに気づけたからです。これまでの人生を振り返ってみると、自分がどれだけ人に恵まれた環境に居たのか、感謝してもしきれないぐらいです。特に、定年後に生まれて間もない私を引き取り育ててくれた祖父母の愛情はどの家族にも負けていないと自信をもって言うことができます。両親についてきちんと聞くことができたのは高校に入ってからでしたが、その頃には私の中で両親と呼べる存在は祖父母でした。ただ、一緒に生活している中でその愛情に気づけず「本当の親じゃないくせに」と反抗的な態度で一方的に思いをぶついたりわがままに過ごしたこともあります。それでも本気で向き合い、受け止め支えてくれた祖父母の存在が私にとって一生大切に理想の姿です。

保育士として乳児院で働くようになり 7 年が経ちました。これまでも、壮絶な境遇の中で生活している子ども達に出会う場面はありましたが、ここで出会う子ども達は生まれて間もない中で過酷な境遇を持っているということ・どうしても保護者のもとで生活できない子どもが多くいることを実感しました。ここで生活している理由は様々ですが、毎日子ども達と関わりながら、私が今までもらってきたものを今度は出会った子ども達に渡していく番なのだと感じています。これから大人になっていく子ども達の基礎となる貴重な時間に関わる乳児院の中で、私と関わった記憶ではなく振り返った時になんとか楽しかった・幸せだったと子ども達が思える事が大切だと考えながら関わるようにしています。最初の言葉に出会い、子ども達との関わり方を日々考え続けています。まだまだうまくできない事の方が多い毎日ですが、大変なことも色んな人に協力してもらいながら乗り越えて、たくさん愛情を伝えていける保育者になりたいと思っています。